

# 駅舎のデザインコンセプトに関する研究

1G04J099-4 森川 貴博\*

Takahiro Morikawa

ここ 20 年、駅はただの交通機関としての建物と考えるのではなく、都市の玄関としてその地域に見合ったデザインを有名な建築家が考えるなど駅舎のデザインが多様化し、重要視されてきている。本研究ではそのような近年の駅舎のデザインコンセプトや建設時期、素材、建築面積、合築されている施設を調べることで、外観のデザインコンセプトごとの特徴を明らかにする。その結果、合築されている施設などに様々な特徴がみられた。

Key words : 駅舎、コンセプト、デザイン、構造、空間、合築施設

## 1. 研究の背景と目的

### 1.1 研究の背景

日本では初めて鉄道が開通してから 130 年の歴史を積み重ねてきた。鉄道開業当時は、駅と周辺の街との関係を考えると、建設用地の制約のため、駅は街外れに建てられる場合が多かった。それゆえ都市計画上まちづくりとは切り離された存在であった。近年、多くの駅前開発が行なわれているのは、中心市街地をまちづくりとは切り離されている駅前にシフトさせ、町の発展の起爆剤のようなものとなるような期待も含まれていると考えられる。駅は交流の拠点として地域の玄関、シンボルともなり、周辺に中心市街地が形成されることによって新たな文化やコミュニティが生み出されており、都市活性化という視点から、まちの「かお」として重要な機能を担って発展してきた。

そして各時代、各地域ごとに特化した駅舎のデザインが重要視されるようになり、それぞれが特徴を持ち始めてきたのである。そこで、現在の駅がデザインを含め何を求められているのかを検討する必要がある。

### 1.2 研究の目的

建築系雑誌などから最近 20 年の間に建設された駅舎を抽出し、駅舎の建設時期、駅舎の形式、建設・運営主体、駅舎のファサードの素材や駅舎内部の合築された施設などを分類、分析する。さらに、それらの駅舎のデザインコンセプトなどを調査することによって、評価の高い駅舎のデザインを整理し、それをもとにそのデザインコンセプトごとの特徴を明らかにする。

## 2. 研究の概要

### 2.1 既存研究

駅舎のデザインに関する研究の主だったものとして高山ら<sup>1)2)</sup>によるものがあるが、これらはデザインの評価項目が抽象的なので、これらをさらに深く具体的に研究する余地がある。

また、歌謡曲の情景描写から駅内部の空間のイメージを考察し、駅空間デザインを検討している研究として島尻ら<sup>3)</sup>によるものがある。駅の駅らしさに関する研究として武田ら<sup>4)</sup>によるもの、竹澤ら<sup>5)</sup>によるものなどいくつか存在する。さらに合築駅とまちづくりとの関係を調べた研究は赤坂ら<sup>6)</sup>によるものがある。このように、駅空間のイメージについては、駅内部に注目して考察している研究はあるが、駅舎外部のデザインについて考察している研究はまだない。本研究は駅舎外観のデザインコンセプトに注目し、その特徴を明らかにするという特徴がある。

### 2.2 研究の方法

過去 20 年で新建築や建築雑誌作品選集に掲載され、賞を受賞した駅舎を対象とする。その対象駅舎に関する資料・文献を収集し、その中から駅舎のデザインに焦点を当て、駅舎の建設時期、駅舎の形式、建設・運営主体、駅舎のファサードの素材や色彩などを分類し分析する。また、現地調査によって、さらに詳細に分類項目を分析し、デザインコンセプトを分析する。それにより評価の高い駅舎のデザインを整理し、その上でデザインを決めるにあたり外観に影響を与えた要因を抽出し、駅舎のデザインコンセプトごとの特徴を明らかにする。

### 2.3 研究の流れ

研究の流れを以下のフローチャートに記す。

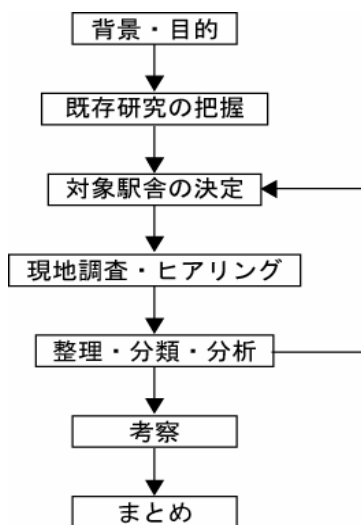


図1 研究の概要

## 3. 現況分析

### 3.1 駅舎デザインの変遷

研究を行うにあたり駅舎デザインの時代ごとの変遷をおおまかに知ることが重要なので、高山らの論文<sup>1)</sup>を参考にして以下に記す。

明治5年～大正初期にかけては、鉄道に関する知識が皆無だったため西洋のデザイン様式を取り入れざるを得なかった。そのため設計は外国人技師が担当し、主要駅はレンガ造りが中心となっている。中小駅は木造が多い。

明治後期～昭和初期にかけて、明治初期の洋風建築の習熟効果が現れ、切妻屋根、ハーフティンバー構法、ドーマ窓などを取り入れる駅舎が誕生した。

大正初期～戦前にかけては和風な駅舎、まちの顔としての駅舎が多くなった。またこの時期から駅舎とビルが一体となった駅ビル形式の駅舎も増え始める。

戦後は線路の高架化が始まり、高架下駅が誕生した。これにより似たような駅舎が多数造られ、まちの顔としてのシンボル性が弱まった。それと反面、機能的かつ合理的な駅舎となった。

昭和後期から平成に変わる前後から、まちの顔としての役割を果たすため、デザイン性が高まっていく。そして地域との融合を主眼においた都市施設を併合した駅舎が建設されるようになった。デザイン的な特徴はガラス、円・曲線の多用が特に目立つようになる。

### 3.2 対象駅舎の概要

2.2の方法で選定した駅舎のうち、新建築や建築雑誌作品選集に掲載された駅舎を下の表1に示す。表には文献を参考にして、その駅舎の施工年または改修された年、その駅舎の外観デザインの特徴を表す記述を示し、各駅舎のデザインコンセプトを読み取り、タイプ分類する。

コンセプトのタイプは3タイプに分類し以下に示す。

#### i) 地域反映型

その駅舎が存在する地域のもつ特色、地域性をキーワードにしてコンセプトが考えられた例を地域反映型とする。日向市駅、川治温泉駅等が挙げられる。

表1. 外観デザインの特徴とコンセプトのタイプ

駅名	施工年	外観デザインの特徴	コンセプトのタイプ
日向市駅	平成18年	地区再生の中心となる大きいシンボル性と高いポテンシャルを持った駅舎	地域反映型
茅野駅	平成17年	田舎の駅舎の開放感をそのまま再現し、地元の山並みを見せる開放感を保存	都市ランドマーク型
守谷駅	平成17年	駅前広場との調和、未来性と地域性(田園)のイメージの両立	造形デザイン型
柏の葉キャンパス駅	平成17年	GRC型を重ねあわせ物理的な立体形状を求め、すべてが異なった面にする	造形デザイン型
柏たなか駅	平成17年	高架軌道の一部がふわりと膨らんでそこが駅になるというイメージ	造形デザイン型
新水俣駅	平成16年	新幹線の速さのイメージを具現化したスピード感を感じさせる駅舎	造形デザイン型
さいたま新都心駅	平成12年	雲や空気のように人を包み込むようなあたたかさ心地よさをもたらずシェルター	造形デザイン型
京都駅	平成9年	複数の機能を持つ巨大で複雑な建物をひとつの建築として成立させる	都市ランドマーク型
大曲駅(秋田)	平成9年	江戸時代から水運の利をもたらしている河川の水のうねりを格子で表現	造形デザイン型
田沢湖駅	平成9年	平面的円弧と立面的ポルト屋根に整合性を求め、かつ秋田らしい駅舎	地域反映型
矢吹駅	平成8年	現在から未来への「架け橋」となるような駅舎	都市ランドマーク型
船橋日大前駅	平成8年	伝統ある大学の過去ー現代ー未来をつなぐ「時」をテーマとした駅舎	造形デザイン型
二条駅	平成8年	巨大構築物である高架橋を街並みになじませつつ、新しい魅力を加える	地域反映型
花園駅	平成8年	新しい技術や素材を使って地域の歴史的背景を利用者に親しみやすく感じさせる	造形デザイン型
京阪宇治駅	平成8年	駅の北側と南側の持つ二面性を、異なった二つの屋根の形状の混成により表現	造形デザイン型
赤湯駅	平成5年	山形県下の青年都市というイメージのもと未来へ大きく開かれた役目を担える駅	都市ランドマーク型
由布院駅	平成2年	情報発信の文化的施設であり湯布院のシンボルとしての駅舎	地域反映型
磐城塙駅	平成2年	山で囲まれ美しい自然と人情がある地域性をなくさぬよう最高高を13mとする	都市ランドマーク型
川治温泉駅	昭和61年	旅人にとって重要な宿駅の特殊性を強く反映させ地域色の強いデザイン	地域反映型



図2. 宮崎県日向市駅

大きなキャノピーの素材に宮崎産の木を使い、階上、階下ともに色温度を電球色で統一し暖かい駅舎を表現している



図7. 秋田県大曲駅

外壁にアルミパイプを敷き詰め、造形デザインにこだわった駅



図3. 栃木県川治温泉駅

地域色のとても強いデザインとなっているが、管理があまりなされておらず、損傷が激しい

#### 4. 現地調査

文献にて事前調査をし、さらに詳しく駅舎デザインの概要を調査するために、対象の全ての駅舎について現地調査を行う。文献に記されている内容と照らし合わせながら外観デザインの調査を行う。さらに、合築されている施設がある場合はそれについても分析するため、施設の方に施設の利用状況や利用者の属性などの簡単なヒアリング調査も行う。以下に調査する際の項目について示す。

#### ii) 都市ランドマーク型

その駅舎が存在する地域において、ランドマークとしての機能を持たせるというコンセプトをもとに設計された駅舎を都市ランドマーク型とする。赤湯駅、磐城塙駅等が挙げられる。



図4. 山形県赤湯駅

山形県下でもっとも新しい青年都市というイメージを持たせるような駅舎デザイン

- ・ファサード (素材、色彩)
- ・コンセプトのタイプ
- ・外観デザインの特徴
- ・合築されている施設

#### 4.1 田沢湖駅

表2 田沢湖駅分類データ

建設、改修時期	コンセプトのタイプ	駅空間の分類
平成9年	地域反映型	地上駅
素材	設計者	合築施設
ガラス、木	坂茂建築設計	観光情報センター等



図5. 福島県磐城塙駅

図書館などのまちの複合施設が含まれているが合築駅



図8. 田沢湖駅駅舎の外観

#### iii) 造形デザイン型

造形デザインを重視して設計された駅舎とする。コンセプトは地域の特徴とは関係しないものとなっている。大スパンのハイブリット構造やガラスを大胆に使った駅舎が多い。船橋日大前駅、大曲駅等が挙げられる。



図6. 千葉県船橋日大前駅の日大口

内部が透けて見えるようガラスを利用しながら、貫禄のある駅舎となっている

駅舎は駅前広場に向かって円弧状に広がっている平面計画だが、屋根をプラットフォーム側と平行な直線にすることにより、中央に向かって庇の出が徐々に大きくなっている。秋田杉のまっすぐ上に伸びる森のイメージから立案した円柱の列柱がとても印象的である。

ファサードは駅前広場側に広く開放されていて訪れた人々を全身で受け入れているようだった。駅前広場側はヨーロッパの古典的駅のような大きな町からの流れを受け止めつつ、駅を透かして下部には新幹線の入入り、上部には背後のきれいな山が見えるとても透明感のある駅舎である。

町の公共施設と鉄道の駅舎が結びついてできた合築駅のひとつで、交流ホールや森と水のテーマ館が付加機能として複合されている。これは田沢湖駅が名実ともに秋田観光のゲートであり、多くの観光客が訪れるため複合された施設であるといえよう。田沢湖の巨大ジオラマがある「田沢湖観光情報センター」はとても良い印象を受けた。ありがちな「特産品コーナー」などは、一つのショーケースに詰め込むのではなく二階に通じる階段のステップの脇に一つ一つディスプレイされていて非常に面白い工夫だと思った。

しかし、ガラス面に看板や文字が多くまた旗もたくさんあり、せっかくの軽快な駅舎が台無しになっているように思えた。



図9. 駅舎内部(2階)の様子

内部は木を大量に使用していて、手すりまでもが木でできている。また、2階からは田沢湖町が一望できるようになっている。



図10. 2階から見える山々

ガラス面が広いので周りの景色がよく見える。

#### 4.2 磐城塙駅

表3 磐城塙駅分類データ

建設、改修時期	コンセプトのタイプ	駅空間の分類
平成2年	都市ランドマーク型	地上駅
素材	設計者	合築施設
木、コンクリート	伊藤邦明+MAIS	塙コミュニティプラザ



図11. 磐城塙駅駅舎の外観

この地域は福島県の吉野と呼ばれるほど木材の供給地として重要視されてきた。そこで磐城塙駅駅舎は木をコンセプトにしている、まちづくりにおいても木の文化の特性を活かす必要があるとされている。また、建物高を13m以下にし、農家と同じようなボリュームにすることにしている。これにより、周りの建築や後ろの山並みにうまく調和していると感じた。その上で屋根を金属にし、その鋭さで存在感をしっかりと持ち自

己主張している。屋根に陽があたるときらりと光り、鋭い印象を受け、街のランドマークとして愛着がわく。

複合施設「塙コミュニティプラザ」が含まれている合築駅となっている。「塙コミュニティプラザ」には塙町立図書館や富永一朗画伯の漫画廊があり、町民の関心が高く、非常に親しまれている。非常に管理が行き届いており、きれいな状態で大切に使われている。図書館では、小学生向けの「読書マラソン」というイベントが行なわれており、私が実際に訪れたのは日曜日だったが、たくさんの小学生が集まり、本を一生懸命に読んでいて大変賑わっていた。

さらに、この駅舎が建設されたことにより、視界を広げるために駅から役所に至るメインストリートの電柱を取り除くという都市計画も行なわれた。この駅舎の改修により、この地域の住民のまちづくりに対する意気込みが変わってきたのだろう。

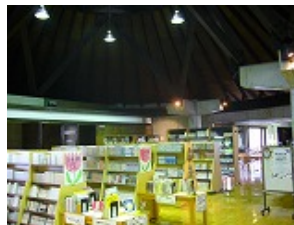


図12. 駅舎内部の写真

図書館には子供向けのコーナーまで設置されており、非常に地域の人々が親しみやすいようになっていた。

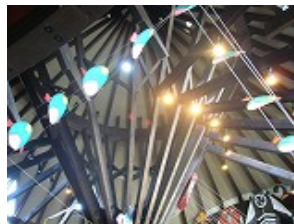


図13. 駅舎内部見上げ

また、内部空間は枝の絡み合う林の中で休息しているような感じを受け、とても落ち着いた空間になっている。

#### 4.3 新水俣駅

表4 新水俣概要

建設、改修時期	コンセプトのタイプ	駅空間の分類
平成16年	造形デザイン型	高架駅
素材	設計者	合築施設
アルミメッキ鋼板	渡辺誠	—



図14. 新水俣駅駅舎の外観

幅2mのアルミ亜鉛メッキ鋼板パネルを、プラットホームを包み込むように配置している。各ピースの角度を変えることにより陽の動きによって光の反射が変わり、表情が変わっていく外観デザインになっている。

また、駅前広場から見上げるとピースは閉じて全体がひとつの金属の塊のように見えるが、ホームからはピースの隙間から周りの山々や町並みが見えるようになっていいる。この地に初めて来た観光客がこの地域の風景をいち早く眺められるようになっていいる。さらに駅広側に雨を落とさないような工夫も施されていいる。新幹線駅舎であるのでかなり勢いのある豪快なデザインである。そのデザインに目を奪われ、わざわざ車を降りて駅舎を眺める人も見受けられた。

ピースがすべて違った角度で配置されていいるので、ただホームを歩いていいるだけでも景色の変化に期待し、そして駅舎に自然と目がいくようになっていいる。単純なようで人を飽きさせないデザインだと思ふ。



ホームは外壁に隙間があるので開放感にあふれていいる。

図15. ホームの様子



またガラス張りで開放感のある待合室には、駅舎デザインに似たベンチが設置されていいて印象深かった。

図16. ホームの待合室

ここで、新建築や建築雑誌作品選集に掲載された駅舎をコンセプトのタイプによって、どのような特徴が現れてくるか調べるため、コンセプトのタイプを基準にして、文献と現地調査結果を参考にして建設・改修時期、駅空間、素材、合築施設、設計者、敷地・建築面積の項目で下の表5、6にまとめる。

表5. 外観のデザインコンセプトのタイプ別の概要

	駅名	建設、改修時期	駅空間の分類	素材	合築施設	設計者
地域反映型	日向市駅	平成18年	高架駅	木、ガラス	地域情報センター	篠原修、内藤廣、佐々木政雄他
	田沢湖駅	平成 9年	地上駅	木、ガラス	観光情報センター等	坂茂建築設計
	二条駅	平成 8年	高架駅	木、コンクリート	—	JR西日本京都建築工事務所、浦辺設計
	由布院駅	平成 2年	地上駅	木、ガラス	イベントホール、足湯	磯崎新アトリエ
	川治温泉駅	昭和61年	高架駅	木	集会室	中山繁信設計室
都市ランド型	茅野駅	平成17年	地上駅	ガラス、コンクリート	図書館、市民館	古谷誠章、NASCA
	京都駅	平成 9年	高架駅	コンクリート	ホテル、文化施設等	原広司+アトリエファイ建築研究所
	矢吹駅	平成 8年	橋上駅舎	ガラス、コンクリート	コミュニティプラザ	柴田いづみ+柴田知彦
	赤湯駅	平成 5年	地上駅	ガラス、コンクリート	観光物産センター	鈴木エドワード建築設計事務所
	磐城塙駅	平成 2年	地上駅	木、コンクリート	瑞コミュニティプラザ	伊藤邦明+MAIS
造形デザイン型	守谷駅	平成17年	橋上駅舎	アルミフレクスラム	—	東急設計コンサルタント
	柏の葉キャンパス駅	平成17年	高架駅	コンクリート	—	渡辺誠
	柏たなか駅	平成17年	高架駅	コンクリート	—	渡辺誠
	新水俣駅	平成16年	高架駅	アルミメッキ銅板	—	渡辺誠+西部交通建築事務所
	さいたま新都心駅	平成12年	橋上駅舎	コンクリート	—	鈴木エドワード建築設計事務所
	大曲駅(秋田)	平成 9年	橋上駅舎	アルミ、ガラス	ふれあい広場	鈴木エドワード建築設計事務所
	船橋日大前駅	平成 8年	地下駅	ガラス、コンクリート	—	伊澤岬、日本大学設計グループ
	花園駅	平成 8年	高架駅	木、コンクリート	—	JR西日本京都建築工事務所、吉村篤一
京阪宇治駅	平成 8年	地上駅	コンクリート	—	若林広幸+京阪電気鉄道	

表6. タイプ別の敷地面積・建築面積と現地を見た感想

	駅名	敷地面積(m <sup>2</sup> )	建築面積(m <sup>2</sup> )	敷地面積平均(m <sup>2</sup> )	建築面積平均(m <sup>2</sup> )	現地を見た感想
地域反映型	日向市駅	5284	2185	3608	1123	現地の杉を使用していて非常に暖かみを感じる駅舎 背面の山々と駅舎が合っていて美しい 京都らしく木を使っているが奇妙なデザイン 町並みに駅舎が溶け込んでいて良い印象 管理が行き届いておらず、損傷が激しい
	田沢湖駅	4424	762			
	二条駅	5997	1890			
	由布院駅	1996	572			
	川治温泉駅	342	204			
都市ランド型	茅野駅	15533	6011	14286	8338	よくつくりこまれていいるという印象で美しい 様々な空間があり面白い まちのシンボルにしては変わったデザイン シルバーメタリックの駅舎が新幹線と合っている 駅舎も特徴的だが合築の図書館の利用が多く驚いた
	京都駅	38076	32351			
	矢吹駅	12031	1125			
	赤湯駅	2932	1218			
	磐城塙駅	2856	983			
造形デザイン型	守谷駅	2944	678	4924	1876	折り紙のようなトラスと無柱のホームが印象に残る プログラミングによる不思議なデザイン よく見るとしっかりデザインがされていいる 外観からとホームからはだいぶ印象が違う 差し込む陽の光が色々な角度で美しい 東と西ではデザインがかなり変わっている コンコースの無柱空間が気持ちいい 架構構造に特徴があり面白い 円を多用し不思議な空間だが居心地はよくない
	柏の葉キャンパス駅	1953	2483			
	柏たなか駅	1953	2556			
	新水俣駅	3534	1663			
	さいたま新都心駅	7125	3774			
	大曲駅(秋田)	14630	1924			
	船橋日大前駅	4738	1678			
花園駅	1893	1200				
京阪宇治駅	5544	927				

## 5. 考察

有名な建築家が関わった事業は数多くあったが、それぞれの駅舎のデザインコンセプトはタイプ分類を通してみると様々なものがみられた。

まず地域反映型についてだが、地域反映型の駅舎はすべての駅舎で外観や内部に木材を使用していて地域の特徴を生かしたデザインになっている。そして駅名を見てみると観光で有名な地域となっている。これは、駅の利用者が主に観光客で、その観光客がその地域を訪れてその地域の特徴を駅舎を通じて即座に知ることができるようになってきている。また、地域反映型の駅舎のほとんどが合築駅となっていて、その施設は情報センターや足湯など、その地域の特徴を強く持ったものとなっており、その地域の特徴をさらに増大させるためであるといえる。

次に都市ランドマーク型についてだが、他の2つのタイプに比べると敷地・建築面積が大きく、今回の対象駅舎についてすべての都市ランドマーク型の駅舎に合築施設が見受けられた。その施設は主にコミュニティプラザや市民館といったその地域のコミュニティの核となるような施設が多いといえる。矢吹駅と磐城塙駅のコミュニティプラザの内部には図書館もあり、都市ランドマーク型の駅舎5件中3件で図書館が複合してある。これは地域の人々が駅をたくさん利用し、駅舎がそのまちの核となるように、新たなまちづくりがスタートしている結果だと思う。

また、造形デザイン型に比べ地域反映型、都市ランドマーク型にはガラスが使われ、透明感があるイメージがあり、背景の景色を強調している。

建設時期、改修時期に着目すると近年では造形デザイン型の割合が大きくなっている。これは近年になり、地域から生まれた駅舎という位置づけではなく、駅舎が更なる地域の発展の先駆けとなるような再開発が行なわれ改修がされているためと考えられる。さらに造形デザイン型の駅舎には複合している施設があまり見受けられなかった。これは駅舎自体のデザインが重要視されているためであるといえる。

## 6. 結論と今後の課題

コンセプトによって駅舎に使われている素材や、合築されている施設が大幅に変わってくることがわかった。地域反映型の駅舎には木が多く使われていて、合築施設は主にその地域の観光案内や特徴を生かしたものとなっており、その地域のプラスになるようになってきている。都市ランドマーク型の駅舎には図書館などその地域の人々が主に使うようなコミュニティのための

施設が合築されている。駅舎がまちの核となるように考えられた結果である。逆に近年増えつつある造形デザイン型の駅舎にはあまり合築施設は見られなかった。

やはり駅はまちの顔としての機能もあるので、今後はまちのコミュニティ施設としての性格を持つような駅舎が増えると考えられる。駅を利用したり、活用したりする立場の人も一緒に駅づくりを行い、同時にまちづくりにまで発展させ、地域を活性化させることができるような駅舎が出てくるのではないだろうか。

今回、新建築、建築雑誌作品選集から対象駅舎を抽出したが、それ以外の評価の高い駅舎のデザインコンセプトについても調べていく必要がある。また、合築施設についても、なぜこのような施設が合築されたのかをさらに明らかにする必要があると考えられる。

## 7. 参考文献

- (1) 「鉄道駅舎のデザインに関する研究 その1 鉄道駅舎デザイン変遷と現存要因の検証」  
高山大志・山本浩二・石川和樹  
(日本建築学会学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠 Vol.2003)
- (2) 「鉄道駅舎のデザインに関する研究 その2 現存する駅舎のデザインの検証と価値評価項目の検討」  
高山大志・山本浩二・石川和樹  
(日本建築学会学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠 Vol.2004)
- (3) 「歌謡曲の情景描写からみた駅空間のイメージに関する基礎的研究」  
島尻伸次・仲間浩一・岡田昌彰  
(1994年度第29回日本都市計画学会学術研究論文集)
- (4) 「駅における機能と駅らしさに関する基礎的研究」  
武田嘉雄・天野光一  
(1996年度第31回日本都市計画学会学術研究論文集)
- (5) 「鉄道駅における駅らしさに関する基礎的研究」  
竹澤晋一・上浦正樹・臼井幸彦  
(日本建築学会計画系論文集 第553号 2002年3月)
- (6) 『まちづくりにおける「駅」の可能性に関する基礎的研究—公共施設と併設した合築駅の動向』  
赤坂智美
- (7) 駅再生～スペースデザインの可能性～  
鹿島出版会 2002年
- (8) 新建築 1960.01～2007.07
- (9) 建築雑誌 増刊 作品選集 1996
- (10) つくばエクスプレス建設物語 都市高速鉄道研究会
- (11) 「市民・行政・専門家の協働による駅を中心としたまちづくり—日向市駅周辺地区におけるまちづくりと連続立体交差事業の記録—」  
日向地区都市デザイン会議